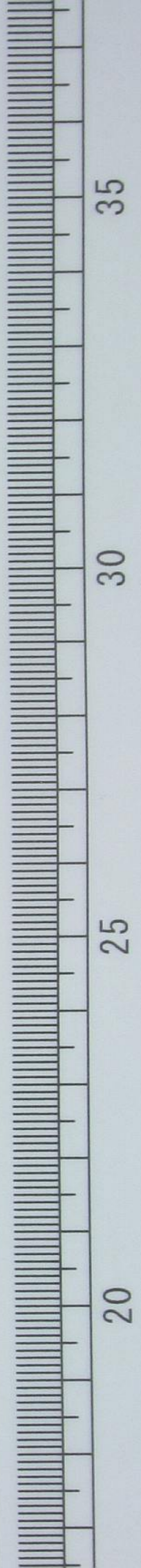


菊
 久保 延 命 袋
 田 延 命 袋
 子 孫 傳
 文 庫
 文 庫

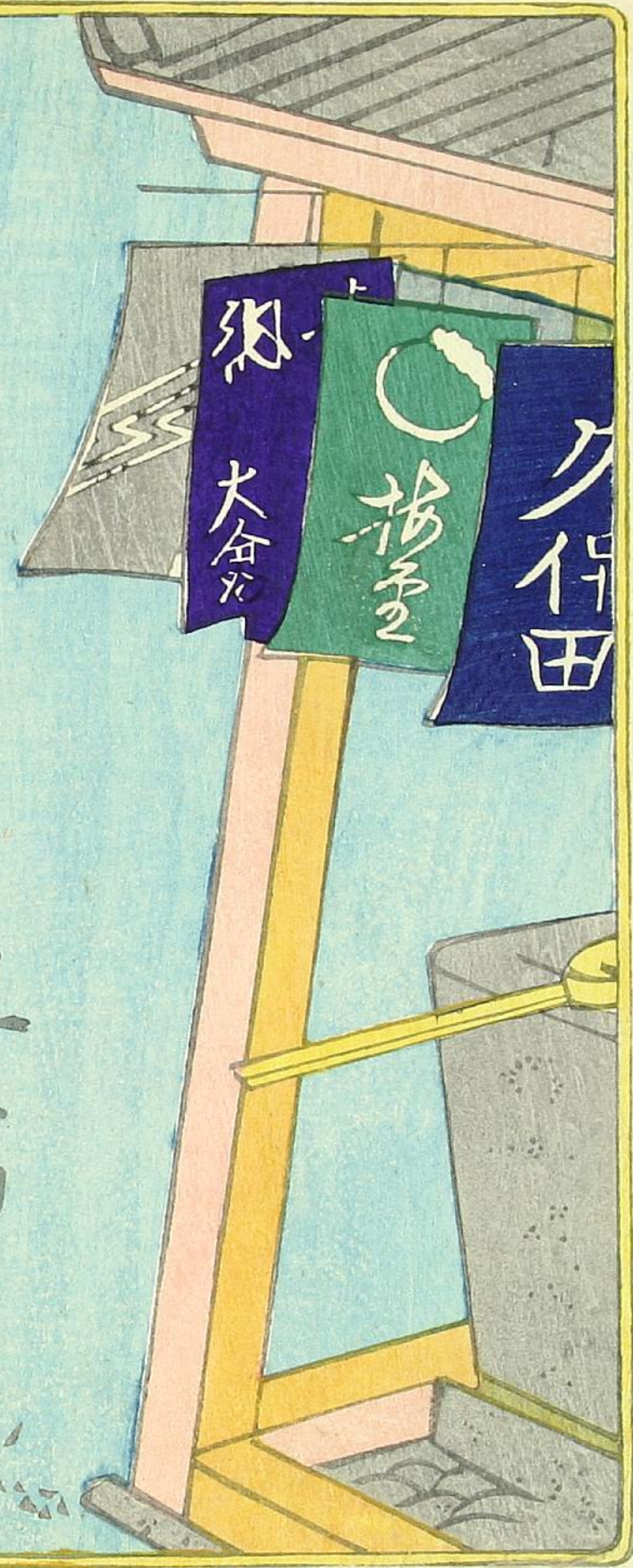
大倉 孫 喜 持
 國 政 臣
 喜 持





折一器十...
 折一器十... A 461
 折一器十... 5
 折一器十...
 折一器十...
 折一器十...
 折一器十...
 折一器十...
 折一器十...
 折一器十...
 折一器十...
 折一器十...
 折一器十...

48-8093



松久種

五篇

延命囊

上の巻

自序

予は横に傳へる者、近曾遠假名讀新、予は傳へる者、久保田と申す。不文短才、裁作の道と好むのあまり。作者のシテとあり、これに口筆師もあつて、初まらぬ雨漏見えある、牛尔葉に地謡曲す、毛筆く、紅毛色、彼れ言の番、板の四座は、へあ、ぬ、三空、此劇、場を、節も直る、河竹翁の、声音、故見、其、似の、歌、猿、乱、拍子、なる、拙、作、も、益童か、松乃、菊、種、より、五編を、此、此、墨、塗、畫、工が、勲、子の、潤色に、あ、り、て、り、る、大、尾、ま、を、モ、ウ、一、編、の、仇、手、抱、く、

明治十三年九月

久保田彦作誌



菊重五二



延命院
の
前住
日
曉
上
人

能
復
尾
上
五
之
助
道
曉
と

妙
法
の
蓮
華
經



四八の讀つて時おえいの娘返り
 合羽の袖とひらひらも酒をのぞいたが

おえいの娘返り
 けいこをみるもあやね

このおえいの娘返り
 コレをどうぞおれが

おえいの娘返り
 身代りするまじい

おえいの娘返り
 身代りにされたいや

おえいの娘返り
 身代りするまじい

おえいの娘返り
 身代りにされたいや

おえいの娘返り
 身代りするまじい

おえいの娘返り
 身代りにされたいや

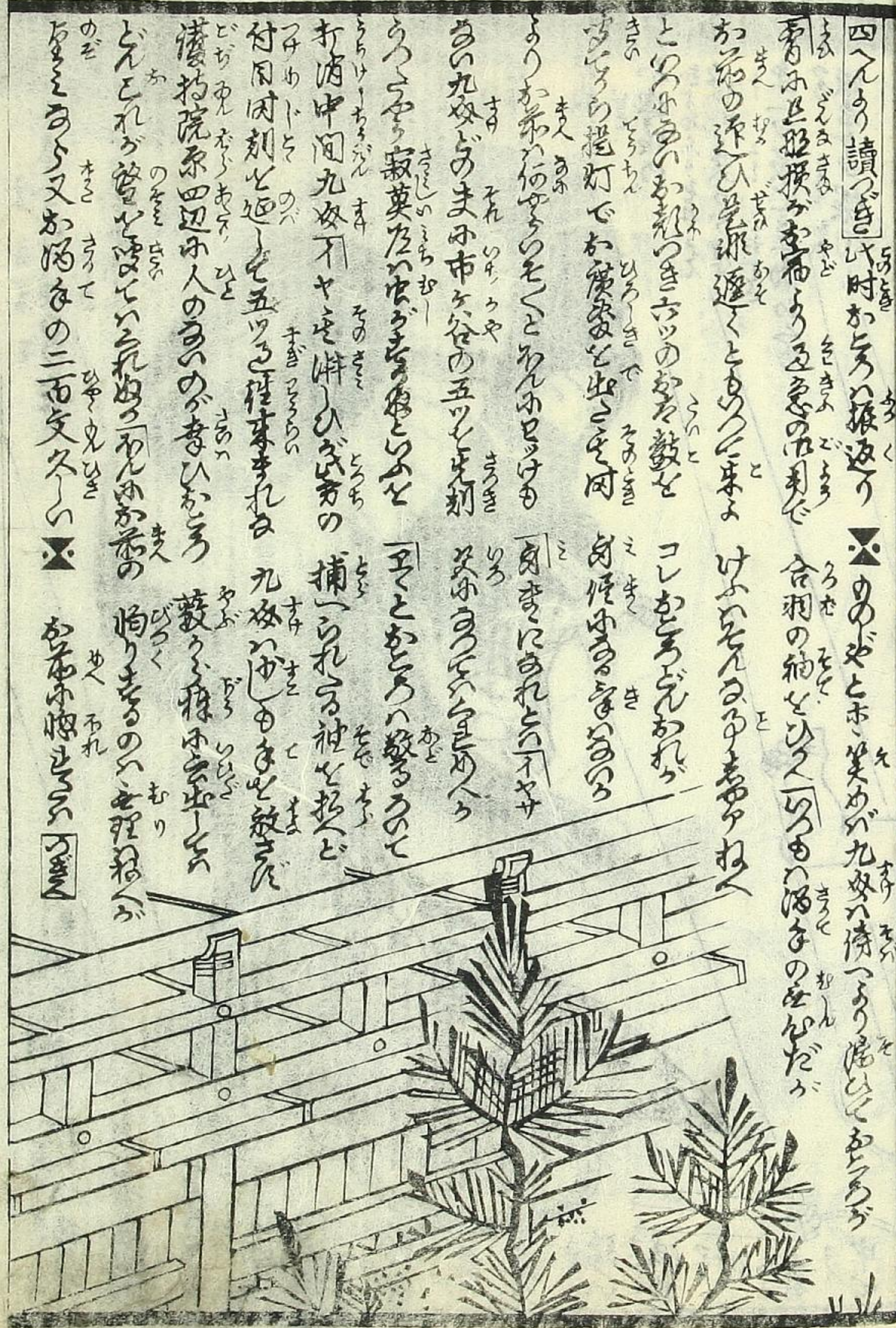
おえいの娘返り
 身代りするまじい

おえいの娘返り
 身代りにされたいや

おえいの娘返り
 身代りするまじい

おえいの娘返り
 身代りにされたいや

おえいの娘返り
 身代りするまじい



ついでに雨の降る中

おのろそな部へ

上つて河まき

襟を揺

肩さで

揚げ

と下

さぬ

お惚姫の

おぼろそなをれん

娘風まうらや

年一ツ夜に三筋のりも

振るる縁回ト

猫をて一ツ緒若こものまねと

ゆふゆふ二合字の中る心も

翁も朋も大由

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな



○三九娘の比人の雨降

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな



おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

おぼろそな

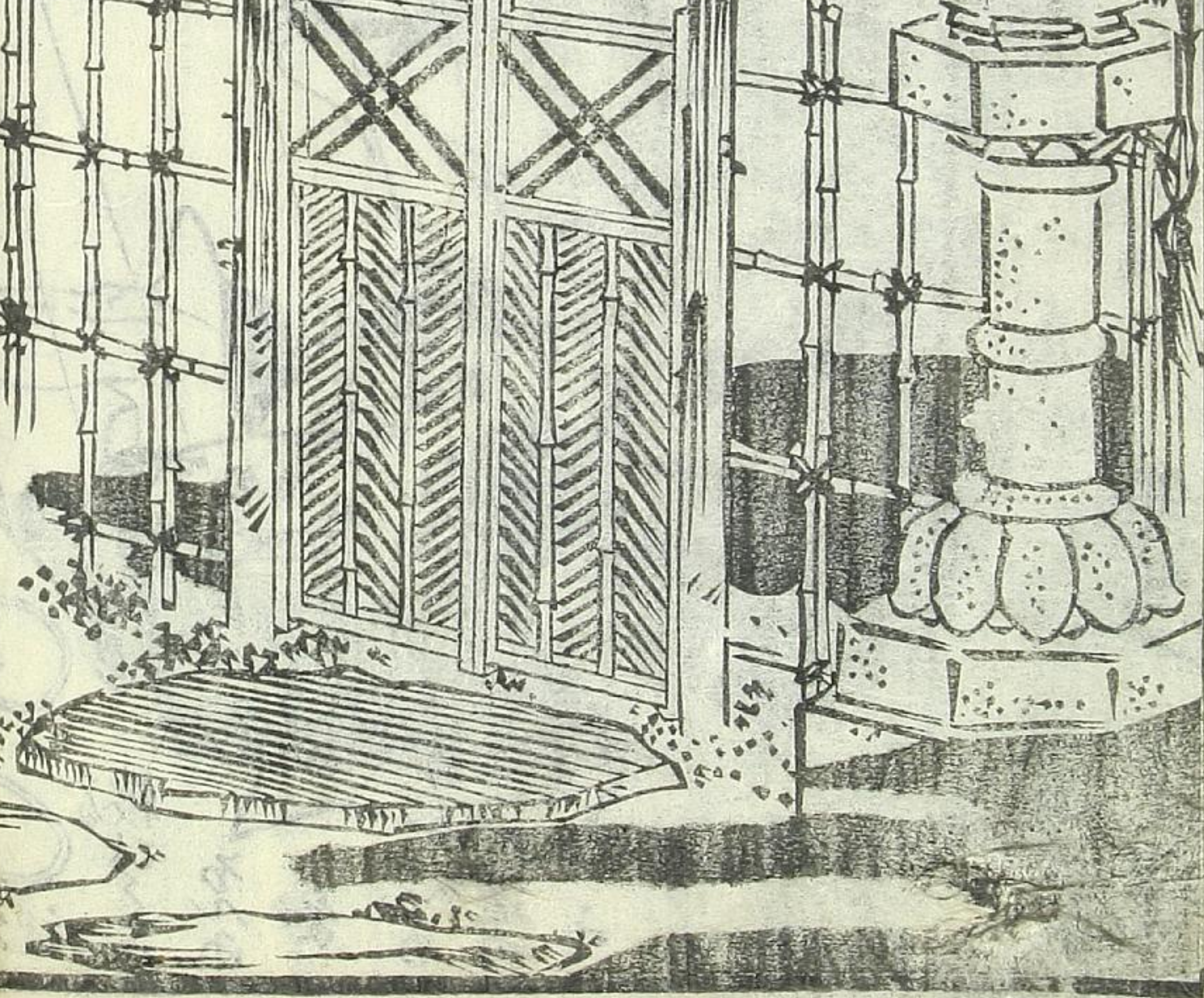
おぼろそな

おぼろそな

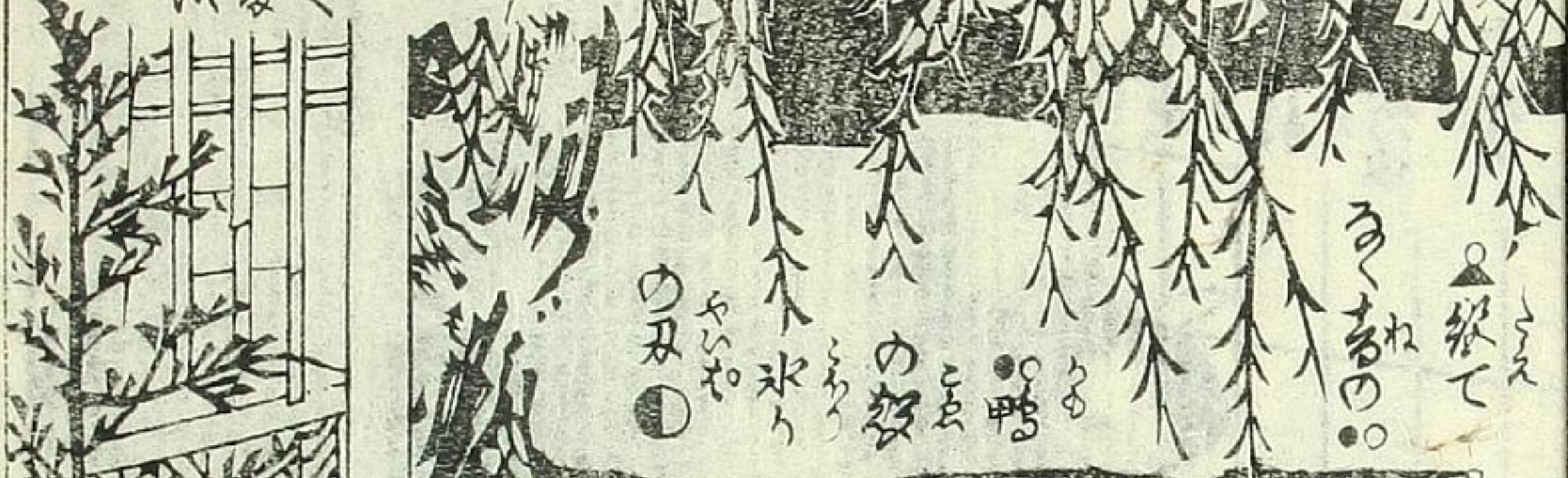
おぼろそな

つぎさう
 れていふ
 中らびが云
 じふらの
 縁之何と
 言ふとも
 いひ出さ
 全論さ
 びつひらぬ
 ちつてきさ
 荒科流かして
 も自由小すと
 腰の服見抜放

おろか
 籠まか
 性未
 稀ふ松原に
 葉小並秀神清
 てつひつ結ひつ
 まつり人殺しと
 大智あげても
 落ふの音小
 くの冬の家



威一つねむを
 ろい花近き一載
 ぼん
 ぼん
 小そららとら
 小オ、くとい
 ちも夜でも抱
 て帰る四の五の
 いさき殺して
 られんと遊馬さ
 神楽むらとさ
 ひさか
 う度されてこち
 と雨の類う小た泥
 やお極の水の回



おろか
 の丸
 くの冬の家
 うい濡れどか
 女子の足弱くあり切る袂切さむ
 又つひ威一の振先を切先をねて
 かころう肩先とすけり切下けさ
 アツととさる血波の初お速う九女も肝と
 消一お茶
 女入殺しと九
 奴が腰小あ
 と付奴
 あらして
 コレ九女
 次

つきこふ合ふ言多敷美服もねまふ前被
 せめて助けをせりてとていふ言はれはるは
 のごまかしのふもはひうんとていふは
 多敷美服もねまふ前被
 虫の跡目ゆきまふと殺しとて糸村まへ
 嘘せしむ福敷美世せりてあむの縁勝つひ
 てまいりて死にまふこれまふ
 まふのうしうしと切らまふも定まる因果
 助けをせりて今宵のは美服とていふまふ
 地獄うら糸村接しつらとていふまふ
 ねまふの鳥のせりて下籠まふ
 ふまふの九ぬが何にあまふ
 つきの物語り
 まふのうしうしと切らまふも定まる因果
 助けをせりて今宵のは美服とていふまふ
 地獄うら糸村接しつらとていふまふ
 ねまふの鳥のせりて下籠まふ
 ふまふの九ぬが何にあまふ
 つきの物語り



思ひの女さるの
 ちとていふまふ
 まふのうしうしと切らまふも定まる因果
 助けをせりて今宵のは美服とていふまふ
 地獄うら糸村接しつらとていふまふ
 ねまふの鳥のせりて下籠まふ
 ふまふの九ぬが何にあまふ
 つきの物語り
 まふのうしうしと切らまふも定まる因果
 助けをせりて今宵のは美服とていふまふ
 地獄うら糸村接しつらとていふまふ
 ねまふの鳥のせりて下籠まふ
 ふまふの九ぬが何にあまふ
 つきの物語り



雨重五上

なきまの風

ちる心後の

糸糸のつとま

柳も枯れを

踏む影の風

傘はてひら

ゆく足と破と

踏ま切

うる九女が

母

茶服

へんを後ろ

うらまの

弱おと

おん

娘は

死と

振舞

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

くす

九女

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

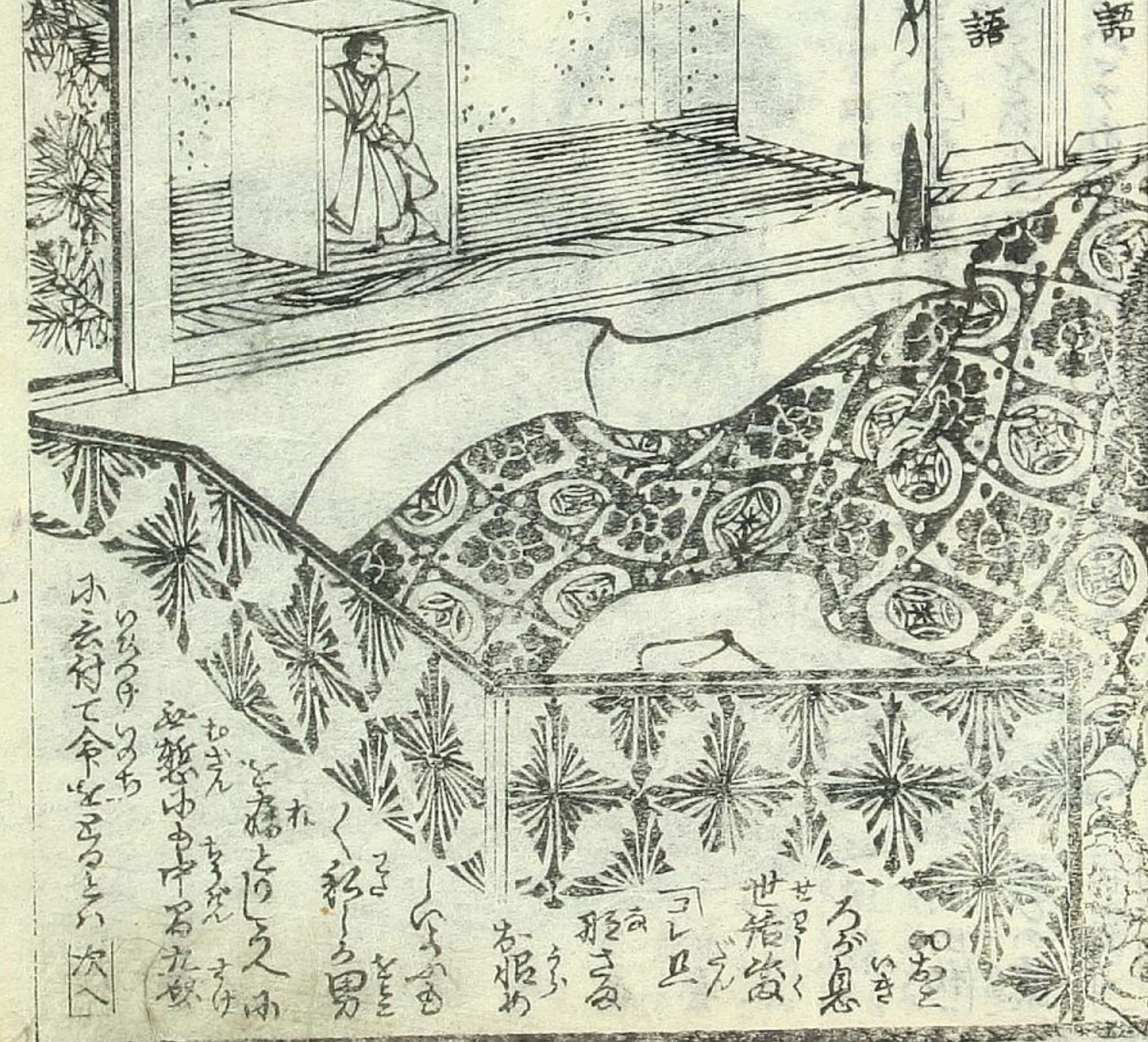
おん

一色 宙と飛鳥のあはれなりあはれなり九女
 かひやもあはれなりあはれなり
 道は遅く遠くはるかにあはれなり
 ○まゝおぼし殿の御心づきの
 新の内よりあはれなりあはれなり
 く敬の御心をあはれなりあはれなり
 局々にはあはれなりあはれなり
 家鴨のあはれなりあはれなり
 招きよめてあはれなり
 うあはれなり
 さめめー松の
 糸村の
 方の



後にはあはれなりあはれなり
 まゝおぼし殿の御心づきの
 新の内よりあはれなりあはれなり
 く敬の御心をあはれなりあはれなり
 局々にはあはれなりあはれなり
 家鴨のあはれなりあはれなり
 招きよめてあはれなり
 うあはれなり
 さめめー松の
 糸村の
 方の

源氏物語
 伊勢物語
 九女あはれなり
 うるふのあはれなり
 身のまをあはれなり
 眠りもあはれなり
 うまくとあはれなり
 あはれなり
 まゝおぼし殿の御心づきの
 新の内よりあはれなりあはれなり
 く敬の御心をあはれなりあはれなり
 局々にはあはれなりあはれなり
 家鴨のあはれなりあはれなり
 招きよめてあはれなり
 うあはれなり
 さめめー松の
 糸村の
 方の



後にはあはれなりあはれなり
 まゝおぼし殿の御心づきの
 新の内よりあはれなりあはれなり
 く敬の御心をあはれなりあはれなり
 局々にはあはれなりあはれなり
 家鴨のあはれなりあはれなり
 招きよめてあはれなり
 うあはれなり
 さめめー松の
 糸村の
 方の

つぎ 恨めや人の心多し 恨れと血を
眼み 糸村とていふをいふむ 形相糸村の
あり 死返逆をまれば 定むるに
あつに 冥途へゆくのが 知りぬ
側近 頼の夢の
六宅の内を 出ぬらん夕顔の
乃 彼車中かゝるまを ありぬ
あつに 恨めや人の心多し 恨れと血を
の夢と 恨めや人の心多し 恨れと血を
牙の 夢に人の恨の 恨めや人の心多し 恨れと血を
精乃 乃ら小逆の 恨めや人の心多し 恨れと血を
年月 恨めや人の心多し 恨れと血を
あつに 恨めや人の心多し 恨れと血を



丸の 然る
方より
その上
人か
殺
早 野
前 出
思ひの 露
中の 巻へ

東京 新編 大國 日本地誌 各 輕多 箱入

開明 東京 新編 日本 小史 各 輕多 箱入

開明 皇國 新編 小學 單語 輕多 箱入

開明 皇國 新編 和英 對譯 輕多 箱入

開明 皇國 新編 近世 英雄 輕多 箱入

開明 皇國 新編 毒物 輕多 箱入

開明 皇國 新編 代紙 輕多 箱入

開明 皇國 新編 大倉 孫兵衛

今 東編 會問屋



菊種延命囊
伍編
久保田彦作發售
國政画 版元白

中之巻

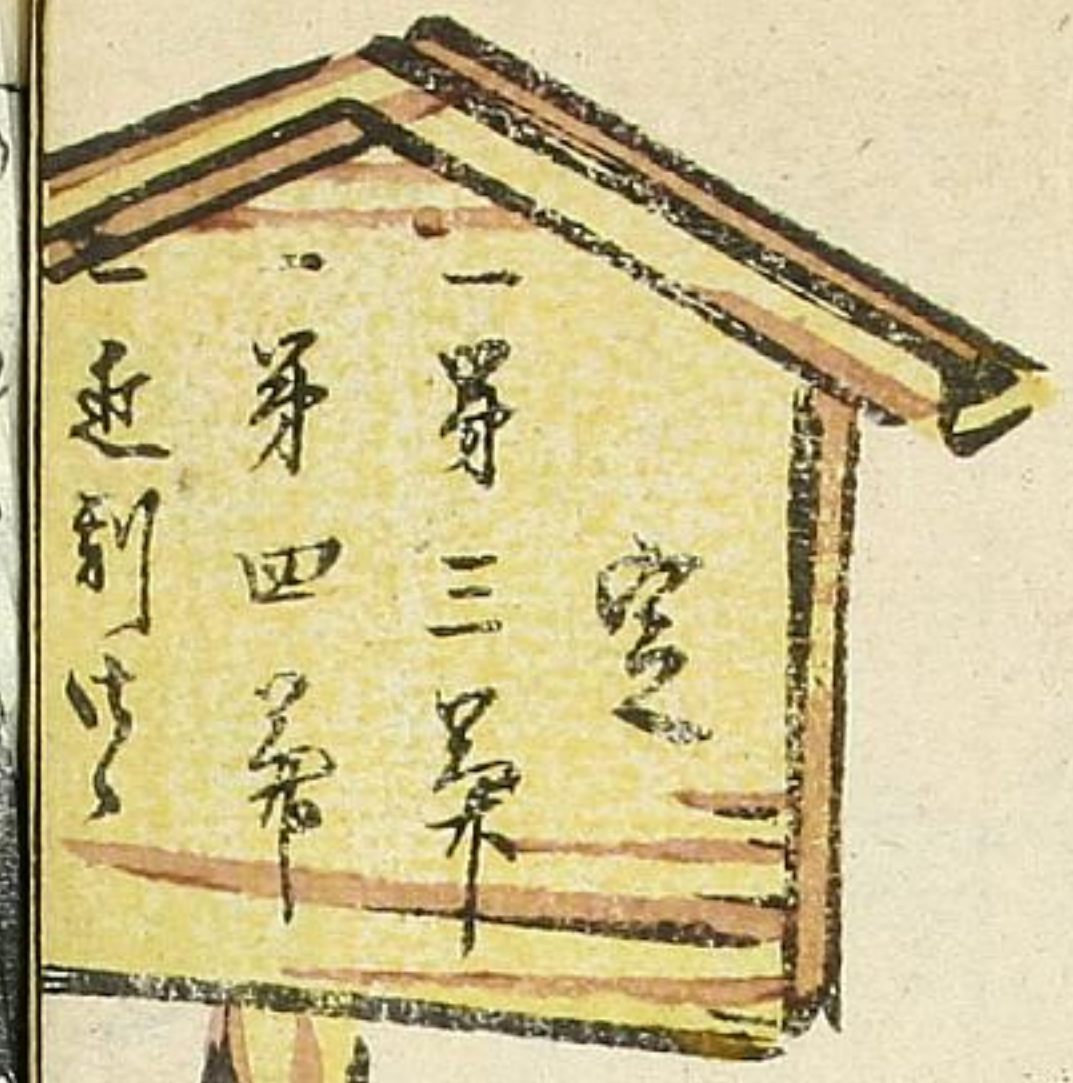




正の色の眼みを晴さんと遠形を色出
 なるなり 涼みと頂上より 雨冷余の
 多死物放死るは徳とも
 ありまよるも ひとまへの
 ありらねれは ぬらす
 月にも報さる
 懐けきき連
 ゆえとれは 盤と
 ちふらなく せむし
 未だ娘也 心とま
 ち者様

今れは
 報ひ思ひ知るは 心知也
 一画

鳥居清満画意摸



一尋三尋
 一尋四尋
 一尋別々

関中

鳥の

さきさきと流る

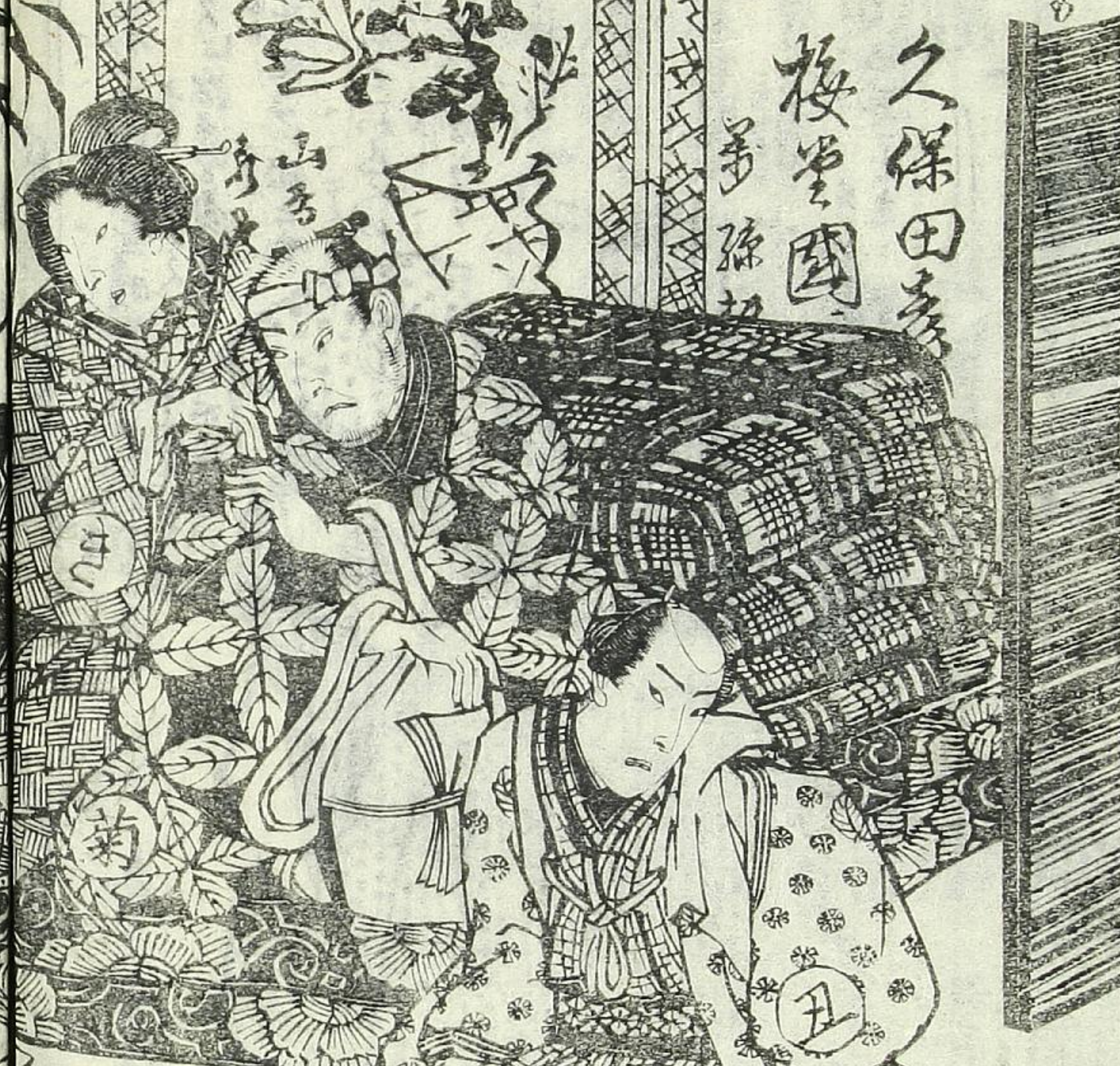
延命薬

あつとつと秋

錦糸堂

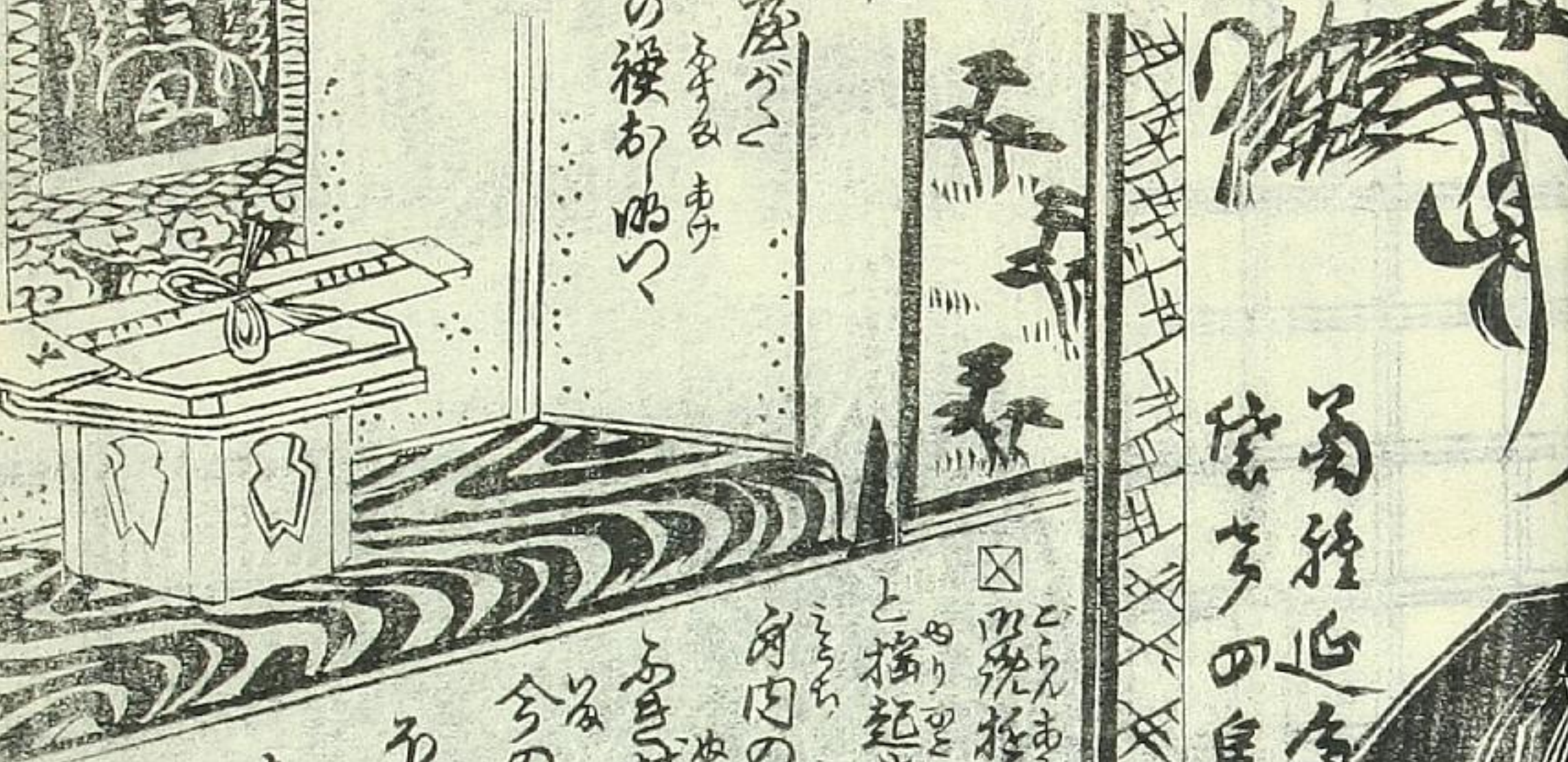


久保田 梅園
手あき 袖あき
移り付入 押さく
相候と ありや
かきま ありや
あきま ありや



梅園 手あき
ありや ありや
ありや ありや
ありや ありや
ありや ありや
ありや ありや

強くむむ 下巻
村の海の上
おとろの後の後
おとろの後の後
おとろの後の後



おとろの後の後
おとろの後の後
おとろの後の後
おとろの後の後
おとろの後の後

つぎ 綾小再三系都へのり
 下奥の甘めと愛小の
 決一これの富因に戸
 めて仕取持る
 市川の正統
 五代目白旗
 小委細と
 活し將後
 末の事ある
 と種と輕し
 へ使客乳
 白白旗放
 梅家が不



役と初め務
 日と出甘が菊
 五年かお破り
 おねと市井の
 後別弱きと
 助るはの気
 兼初日の
 大八あて
 のとゆわ
 宿面を
 絶しつ
 天の之香
 登り
 の初冬

運とまのき
 且強知が心
 狭くやとも
 まると大と
 まる小人の
 業のりと添く
 是も打款
 き惣ふあ
 種と名残と
 下先上京
 強良し及を
 みる力らと
 せんとい



△まらうの
 櫻町中村社の
 合と方へ依
 後別の極極
 彼能名存本
 忠臣蔵小と
 梅若あの中
 の助と初め
 己れは
 △八

上京
 菊五
 ○相中
 糸就子系
 船江条下る町
 小使病と定所
 甘と進と二十の
 兼波小流
 好むの都の人
 情

今更に仕打の御座り
 老練の妻なるれと鬼
 角小巻
 老練跡
 妻れ母
 毎毎
 後母
 兄物也
 不八女
 五不呂
 後心と
 痛めり
 と候小巻如く人も合縁斎縁也

此は京杯の寓居世大坂の地儀
 中助の先幸死去一後家
 右は侍室助の共小梅若くは若小
 同ト四條小
 家持を補
 理任の共小若
 又副助と共小
 丑と助の共小
 中助の共小
 何とあくわの若きと共小



杖と
 女小
 母の助
 いと弟殿を
 空助を頼むの弟運引
 とかたつねに頼むを金に中
 ざれば出入が選装被中
 初め野辺の送りも立
 仇小は近所の(一)

今更に仕打の御座り
 老練の妻なるれと鬼
 角小巻
 老練跡
 妻れ母
 毎毎
 後母
 兄物也
 不八女
 五不呂
 後心と
 痛めり
 と候小巻如く人も合縁斎縁也

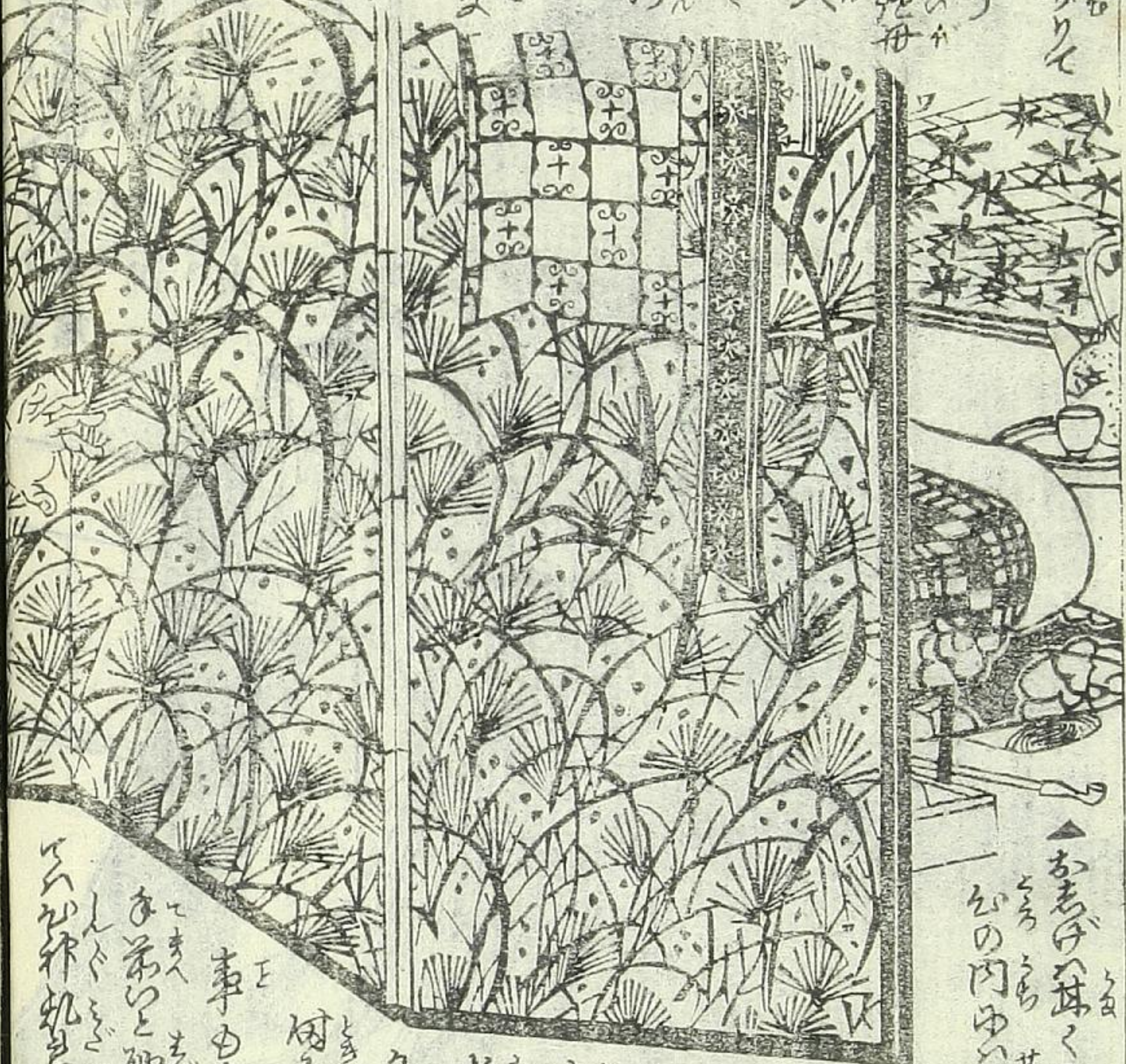


打却
 小巻
 角小
 老練
 妻れ母
 毎毎
 後母
 兄物也
 不八女
 五不呂
 後心と
 痛めり
 と候小巻如く人も合縁斎縁也

寺院は暮りて
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成

おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成

おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成



おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成

おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成

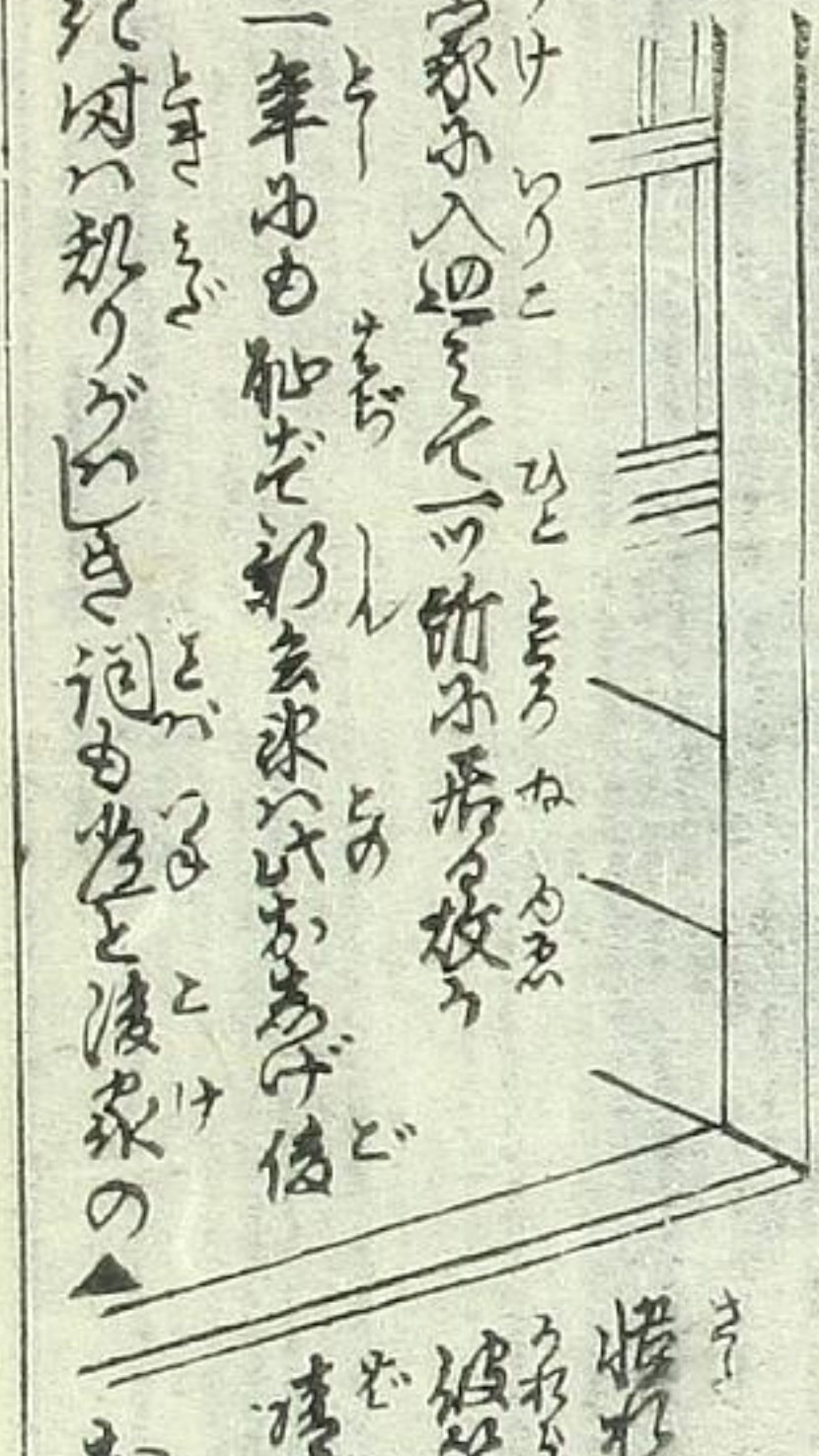
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成

おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成



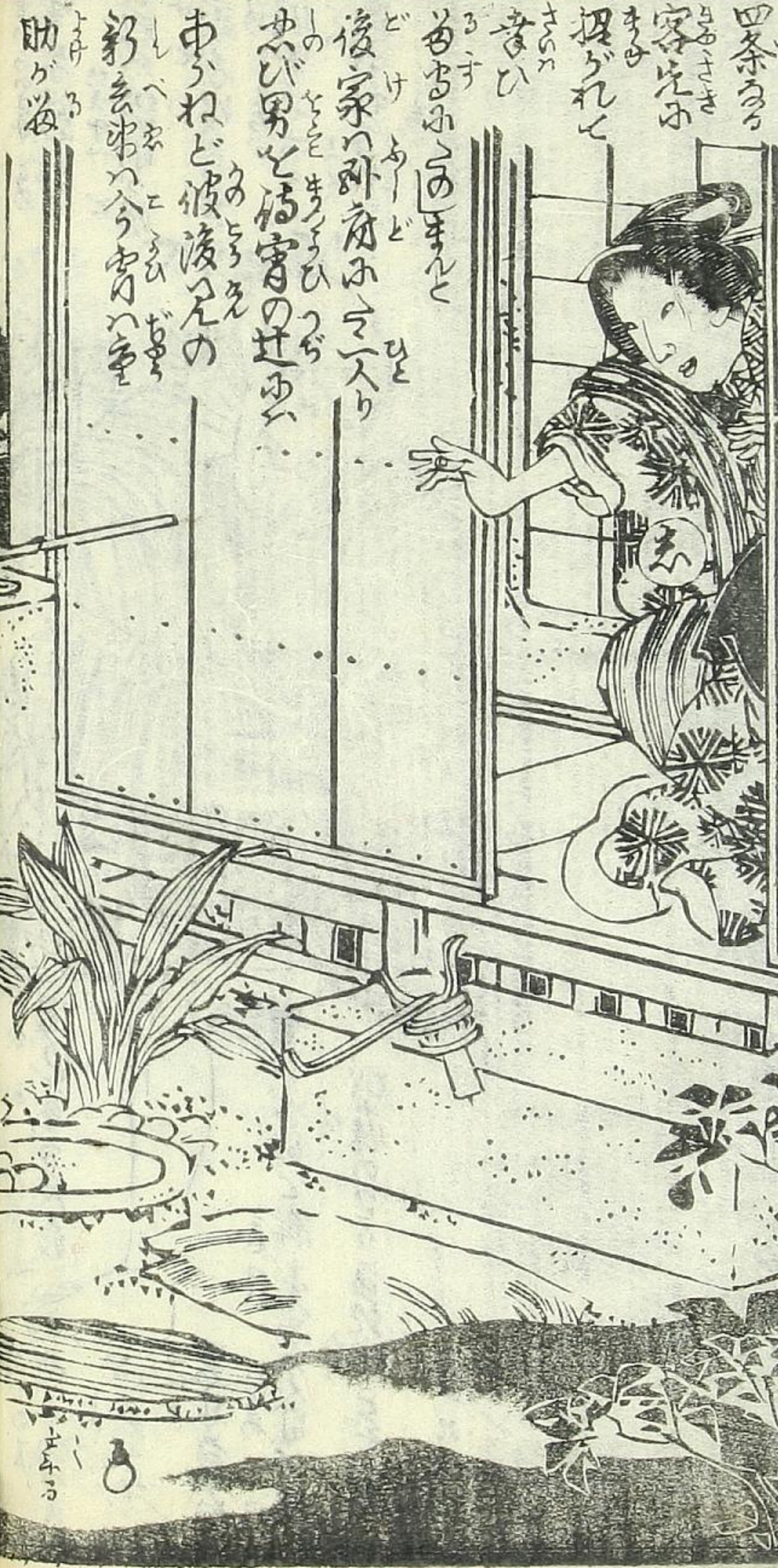
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成

おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成



おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成
おぼやけの御成

「つぎ」
 しがたの夜にあらはれり丑と助と物
 きて晩の必らひおひまよとぬて
 若面密おまかり暗を助の



「おのれ」
 客定お
 提がれ
 音い
 首おひま
 後家の外おひま入り
 おひま男と暗の辻を
 おねと彼後屋の
 影を影の今宵の事
 助が海



「おのれ」
 密
 まと
 招きよれ遠は
 ぼく今夜二人の
 実証え届けんは
 おひま男と暗の辻を
 影を影の今宵の事
 腰に刀おひま
 知れ所の
 密まが
 助が海
 密
 まが

栄重五中

カサノと手合の音とて
身傾けて
傾肉も本
雲迎と成
て和府の内
あつた之助家
肉の老小の付
らほつとあつたの波
あつた引と成
お整と待め又
の疾と物しつ
ほりひれ合のあつ
事と成たは口の



あつた引と成
お整と待め又
の疾と物しつ
ほりひれ合のあつ
事と成たは口の

ぬは方の妻と助捕(り)と
おと
ねどもんはに成家
てはと成たのぬ
さてと成たのぬ
○おと内小
ほのくと成
あつた引と成
お整と待め又
の疾と物しつ
ほりひれ合のあつ
事と成たは口の

かつた引と成
お整と待め又
の疾と物しつ
ほりひれ合のあつ
事と成たは口の

ぬは方の妻と助捕(り)と
おと
ねどもんはに成家
てはと成たのぬ
さてと成たのぬ
○おと内小
ほのくと成
あつた引と成
お整と待め又
の疾と物しつ
ほりひれ合のあつ
事と成たは口の

あつた引と成
お整と待め又
の疾と物しつ
ほりひれ合のあつ
事と成たは口の



あつた引と成
お整と待め又
の疾と物しつ
ほりひれ合のあつ
事と成たは口の

ぬは方の妻と助捕(り)と
おと
ねどもんはに成家
てはと成たのぬ
さてと成たのぬ
○おと内小
ほのくと成
あつた引と成
お整と待め又
の疾と物しつ
ほりひれ合のあつ
事と成たは口の

かつた引と成
お整と待め又
の疾と物しつ
ほりひれ合のあつ
事と成たは口の

けふ夜て何と居るのぞ
とあらはれ出合へくと

果の家
中の大
發勃
助由欠
きりも
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ



おのれと家内へはどめ
おのれと家の外おのれ
おのれと家内へはどめ
おのれと家の外おのれ



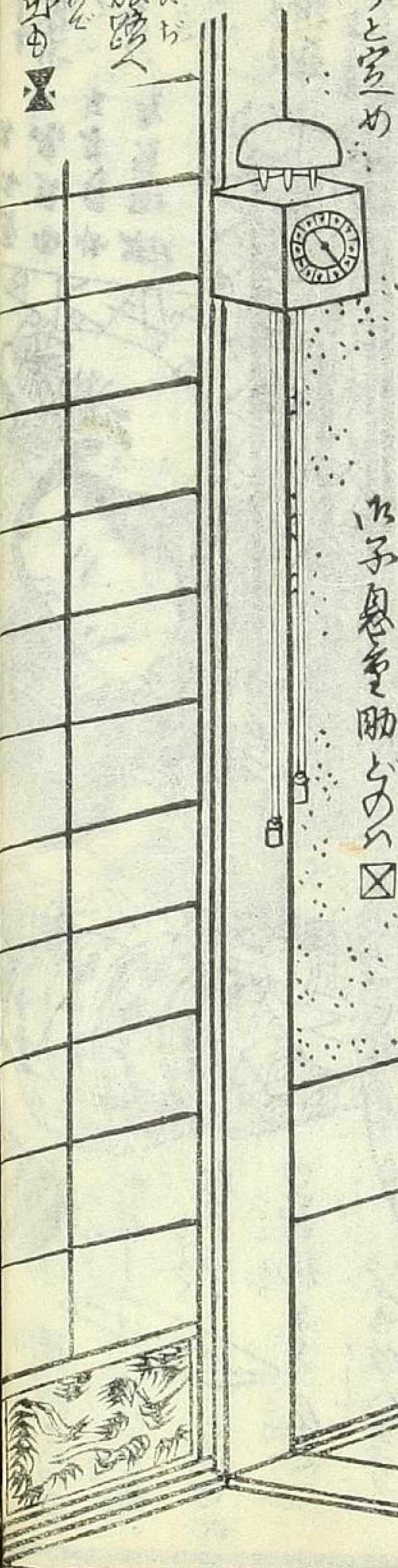
おのれと家内へはどめ
おのれと家の外おのれ
おのれと家内へはどめ
おのれと家の外おのれ

命の家
おのれと家内へはどめ
おのれと家の外おのれ
おのれと家内へはどめ
おのれと家の外おのれ



おのれと家内へはどめ
おのれと家の外おのれ
おのれと家内へはどめ
おのれと家の外おのれ

つぎ 招きたるけ 風邪お優され振出し葉紙のたが 女よりそまこと何しと取出し笑さるるを
 獨ひと打撃く心 後におまはりのさうりて今お術優の 死の噂もまう返々世の上を若 兄弟おん
 の内であられり 数をあ入りはまの二の勢うと俸利 下巻へ
 ○冬の日御のま 後へおまはりのさうりて今お術優の 死の噂もまう返々世の上を若 兄弟おん
 一その小葉紙の返 数も入りはまの二の勢うと俸利 下巻へ
 備ひに旁の山の侍と 死の噂もまう返々世の上を若 兄弟おん
 俵ひ来る風もおん 死の噂もまう返々世の上を若 兄弟おん
 去むおまの助今宵 死の噂もまう返々世の上を若 兄弟おん
 降りと空め 死の噂もまう返々世の上を若 兄弟おん
 死出 死の噂もまう返々世の上を若 兄弟おん
 の後路へ 死の噂もまう返々世の上を若 兄弟おん
 門ゆも 死の噂もまう返々世の上を若 兄弟おん



東京東京東京大町八色入一日本地誌界輕多羅八
 開明東京新聞朝日日本史界輕多羅
 開明皇國新聞
 小學教授書藝種
 和英對譯輕多羅
 近世英雄輕多羅
 萬代英傑教
 千代英傑教
 大倉孫兵衛

分
 和英對譯輕多羅
 大倉孫兵衛





つぎ
 そゝこ
 あれど
 お彼
 お母
 然ん
 吾が
 のと令
 ぬお小
 國子の院
 代と初め
 たる後た

一本花や徳多の
 ありとつて死ぬ
 のち

おあ
 若血



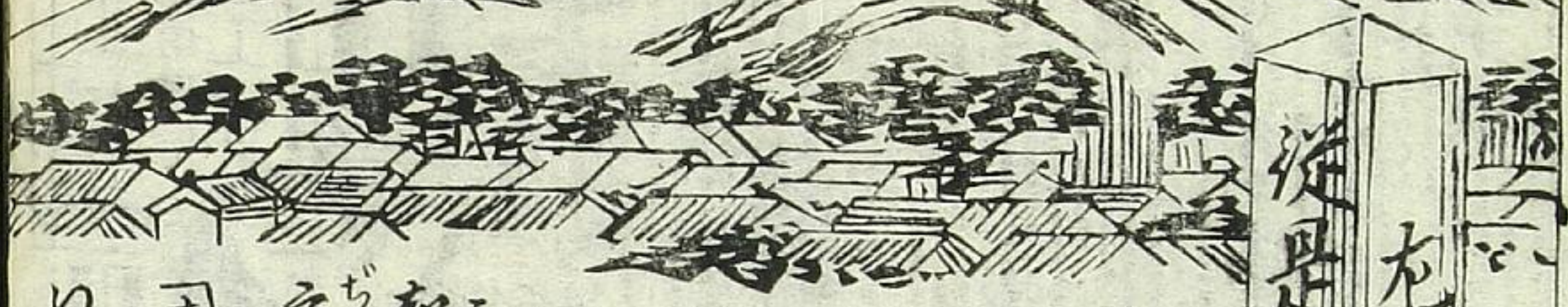
とやに松
 とく相
 井まを
 松高せ
 そゝこ
 父や
 純と取
 あれと

実子... 切て... 助と... 夫... 面...
 松高せ... 父や... 純と取... あれと...
 刃

おあ
 若血

龍矢橋舟場又ち
從是東大津野

龍矢橋の
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ



龍矢橋舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ

舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ

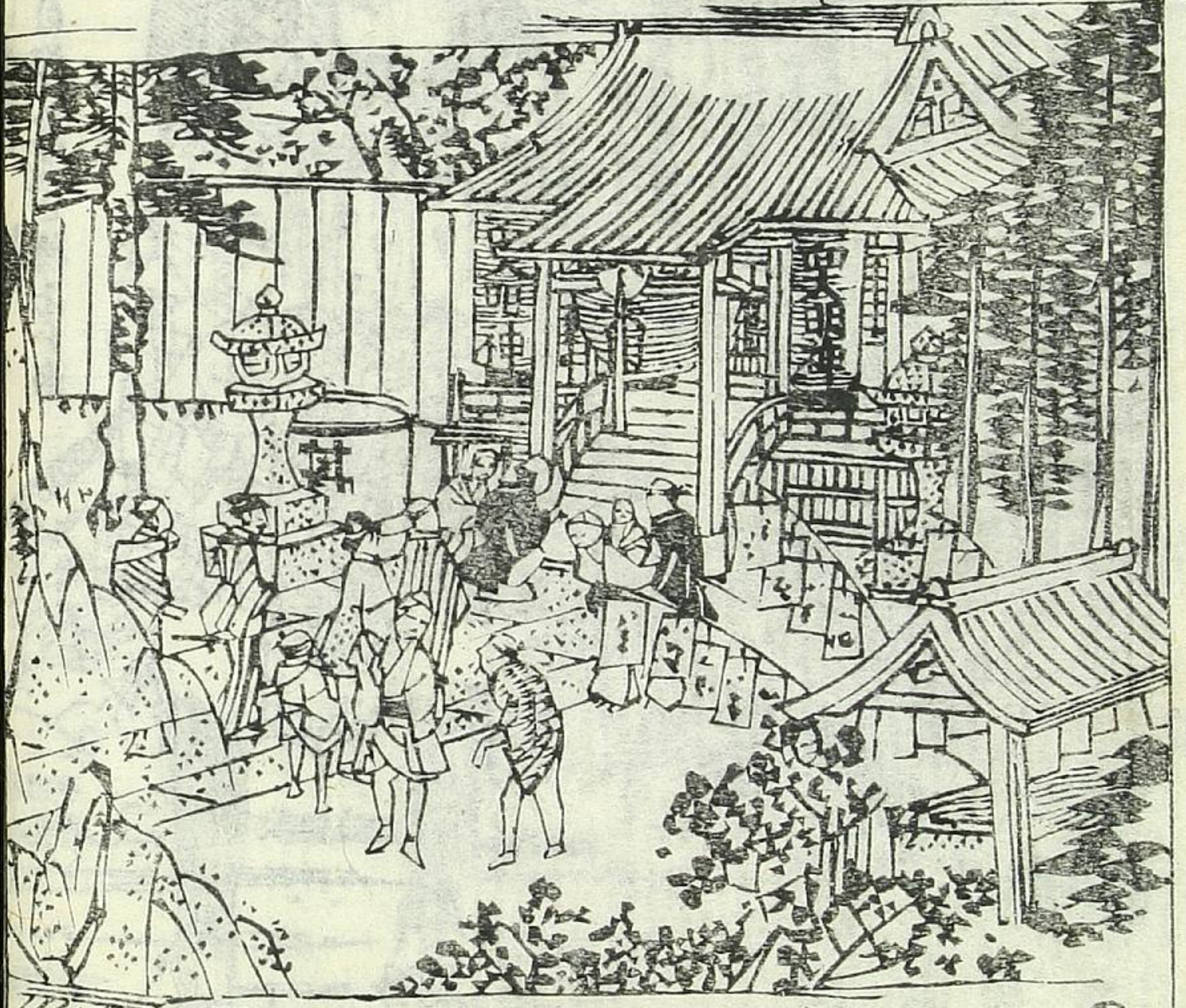


龍矢橋の
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ

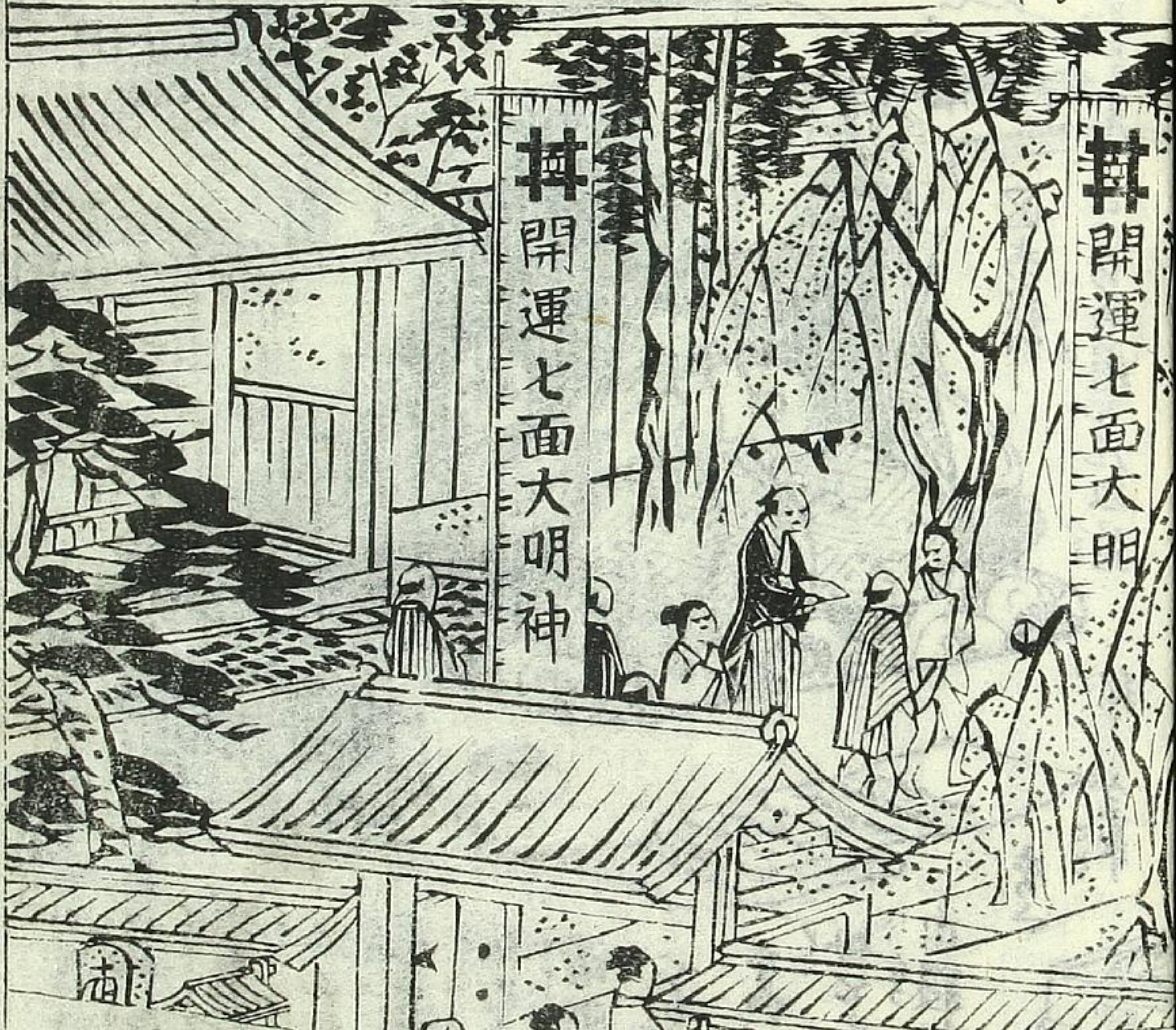
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ
舟場の
名義は
今も昔も
変わらぬ

母が名品仍母人おまへが
 愛ひ周果同士の事
 中由藤まじく兄弟もみ
 多しお前腹あがる様の
 母親おのちこそしゆ
 親ごものをまをてあつこ

江都谷中延命院
 安置の七面大明神
 靈驗著し
 参詣群集也



新編
 母の事
 母の事
 母の事
 母の事



母が名品仍母人おまへが
 愛ひ周果同士の事
 中由藤まじく兄弟もみ
 多しお前腹あがる様の
 母親おのちこそしゆ
 親ごものをまをてあつこ

お家
七福す
心も白紙
の隆子へ
ある人
新小目か
の華横
晴さんと
山あふる
ふ小実あ
親の西親の
履服へ物と



お上の方の婿以
まご上も父の
代々久し夙
債もあれと一切
是まを報への
面をうらみの帳
消し命を替
ても備へる
まごを
母と大母とを以
自報とせらるる
お家へ

あつて放る
新苑は西儒
獨以と自ら振
自業自得決
て新へお世を助
おの仕業を
おのの初つて着る
ふりやちあふ解死
人おあふおあその解
で涙ぬお上のお個へ
まひく招
うらまふ
お礼へが



おのちのち
母助の義理ある
孝婦と
内外
の考へ
口止と
くあつて



決て
おのの
及ぶと
せあ
たる
情
の相
由世の助も
俯向て教も
おあひす

身遣し者
 天の御孫
 牛のあつら
 頼みの事
 八都ね
 一人出立
 来る由九
 族天小
 生むるとの
 松枝小
 茶の目
 今目ア



今目ア

今目ア
 天の御孫
 牛のあつら
 頼みの事
 八都ね
 一人出立
 来る由九
 族天小
 生むるとの
 松枝小
 茶の目
 今目ア



今目ア
 天の御孫
 牛のあつら
 頼みの事
 八都ね
 一人出立
 来る由九
 族天小
 生むるとの
 松枝小
 茶の目
 今目ア

今目ア

又はいつと
 母祝と蒲
 と実や
 きて頼ら
 日れ綿糸
 の山の番系
 裏方坊以
 近江路を夫
 橋の舟に法
 の及あふん



〇たれとほり
 家好密
 出せその

〇玄絶不
 丑の助いそ
 年の十二月
 密小江戸
 表小京世が
 北花屋の親父



廿一
 三の
 中子

日蓮宗延命院の住持中野日曉上人といふ道
徒ありてを尋ねて形を必らば弟子にあられ

母と狗ふらう久しに別を幸まふ正月の松の
内谷中の寺とて名は後小寺と日曉上人の

七十余才の長身中老おぼら
む住職多む母と

助由打脱らひ妻
内を乞ひ面含すれば

日曉の打教るきと年正に
結髪世に名放風の便り不たひに京那

延命院小剃髪して日曉といひ
併教不心を委ね道德の聞え高く
帰依の信者日々ありといふ



の号も毎にあり又

シテ又
は下
定めて
出初
お目せ
あて

東京新図

開明東京新圖

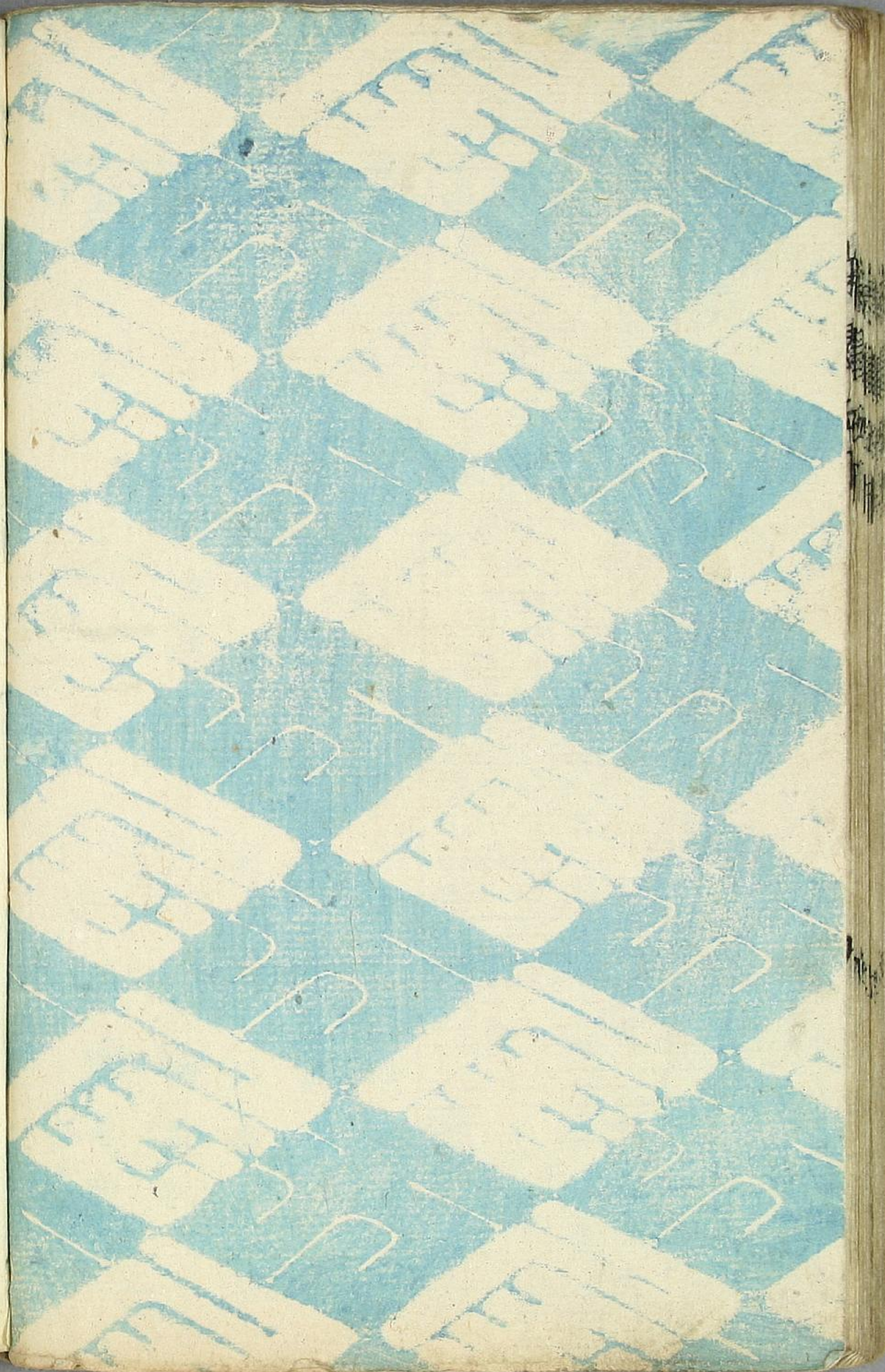
開明皇國新圖

開明皇國新圖

開明皇國新圖

分
東洋書局
問屋
大倉孫兵衛

Handwritten text in vertical columns on a lined page. The characters are faint and difficult to decipher, but appear to be organized into several columns of writing.



010190510595

御届 明治十二年九月一日

日本橋通一丁目十九番地

出版人 大倉孫兵衛

編輯 久保田彦作

画工 梅堂國政